図像新聞の視野からの清末上海における西洋娯楽活動の伝来と受容の一考察

――『点石斎画報』と『図画日報』を中心に――

鄧　　怡　然

Analysing the Development of Western Entertainment in Shanghai in the Late Qing Dynasty from Dianshizhai Pictorial And Picture Daily

DENG Yiran

Dianshizhai Pictorial and Picture Daily are the earliest such kind of newspaper in modern Chinese history. They are rich in content and illustrating pictures and easy to understand. In social life, there had been a series of new changes, and the characteristics of mixed Chinese and Western show had been highlighted. This thesis takes Dianshizhai Pictorial and Picture Daily as basic data, generalizes the development of Shanghai and its western entertainment industry in the late Qing dynasty, analyses its causations, and describes the development of entertainment industry in the late Qing Dynasty in Shanghai.

Keywords: Dianshizhai Pictorial, Picture Daily, Western entertainment, Shanghai, The Late QingDynasty

キーワード：『点石斎画報』『図画日報』　西洋の娯楽活動　清末上海

はじめに

アヘン戦争後に開放された貿易港のうち，上海は貿易港として注目されるようになる以前から，既に移民都市として発達してきており，他の貿易港よりも外来文化を受け入れる素地を有していた。特に租界では行政権と治外法権が認められ，清朝政府の施政権がほとんど及ばない状態になり，上海租界の外国人は，租界創設以来，様々な娯楽組織を作って活動し，1850年代から，競馬，ボート，フットボール，陸上競技などのスポーツ活動および演劇，絵の展覧会や音楽会などを展開していた。これらの娯楽活動は，中国人に近代スポーツや芸術を見る機会，理解する機会を提供した上，西洋文化や思想の受容の土壌を形成した。次第に清末上海の中国人はそれらの目新しい娯楽活動に関心を持ち始め，彼らの生活に

外国の生活方式が浸透していった。このように，上海租界で行われた西洋の娯楽活動は近代の先進的な大衆文化の中国への導入，展開において重要な役割を果たしたと言えよう。

第一章　競馬

上海の人民広場は19，20世紀においてすでに注目を浴びていた都市センターであり，現在の上海の行政，文化，商業，交通の中心地である。イギリス租界設置の翌年，1846年にはすでに広い公園が作られ，競馬が行われていた。1850年には新しい公園と競馬場が作られ，日常の乗馬コースとしても利用されたが，地価の上昇のため，1854年より西へと移転することになり，1861年には第三の競馬場（New Race Course）を作り始めた。これが現在の人民広場・人民公園に当たり，「遠東第一跑馬場」と称され，旧上海で最も盛大なスポーツ活動－競馬はここで開催されていた。競馬は単なる娯楽活動としてだけではなく，音楽，文学，絵画などの創作活動の主題として取り上げられ，社会制度にも入り込んで一連の競馬文化を形成してきた。

「競馬」を題材としている最初の記述は1869年４月『教会新報』第１巻33号に掲載されている「看西人跑馬歌」である[1)]。後にこの文章は同年の『広州新報』に転載されている。1872年『申報』が創刊された時にも，西洋競馬の記事「馳馬角勝」が掲載されており，競馬に関する記述が多数見受けられる。

> 西洋人於廿二至念四日，連日馳馬角勝負。定於十二鐘馳三次，停壹點鐘稍為休息再馳，至夜方散。當其馳馬之際，西洋人則異樣結束，務求精彩。或二三騎，或三四騎，連轡而行，風馳電疾，石走沙飛，各向前驅，不為後殿。倘行次齊整，無有參差，則勝負均焉。若壹騎稍有前後，則高下立判，勝者揚揚自得，負者退然氣沮，而旁觀則私相賭賽，以馬之優絀，判我之輸贏。如甲謂馬之赤色者勝，乙謂馬之白色者勝，倘赤者稍前，則甲勝矣；白者稍前，則乙勝矣。其勝負以朱提數萬計。中國之六博蹋鞠，鬥雞，走狗諸戲，雖極喧闐，無此盛舉也。西洋人鹹往觀焉，為之罷市數日，至於遊人來往，士女如雲，則大有溱洧間風景，或籃輿筍轎，得得遠來；或油壁小車，轔轔乍過；或徙倚於樓上，或隱約於簾中，莫不註目凝神觀茲奇景，而蹀躞街頭者，上自士夫，下及負販，男女雜沓，踵接肩摩，更不知其凡幾矣！昔人所謂前有墜珥後有遺簪，方此之際殆又甚焉，誠海內之巨觀，古今所僅有者也。惟華人觀者過眾，幾於無處容身。倘有人能於隙地編以蓬茨成壹平臺，俾觀者居其上而少取其值，則既可以從中獲利，而亦無擁擠之患矣，豈不甚善？惜乎無有計及此者耳！

この記事で競馬を行う日に貴族から物売りまで，大勢の観客でごった返し，開始時間に遅れてきた者は入る隙間もないような盛況が描かれている。また，この記事によると，『申報』の記者は西洋人の競馬

1）夏曉虹，「晚清賽馬軼話」，『尋根』，2001年，101頁。「看西洋人跑馬歌」：西洋人跨馬馬路行，削木為坦泥築城。天公為放三日晴，驅馬出城馬陣成。馬群千百縱復横，黄膝紫騾非壹名。馬車壓陣轆轆鳴，六咨在手塵不驚。壹騎突出霜蹄枉，十騎百騎紛逐爭以人習馬馬骨平，馬慣漪人眼不生。短衣穩坐稱猴精，長說濃垂氣崢嶸。壹鞭項刻十裏程，風馳雨驟送且迎。宛如樹上跳服姍，又如煙外流黄鶯。忽若電閃激火星，忽若水面行雷建。長竿壹指駛足停，馬立四殲皆無聲。徐行緩心細柳營，伯樂於此窺全形。我朝尚文久息兵，西洋人安分不變更。回思天驥下神京，共樂承平四海清。

を報道し，競馬現場の混雑状況を認識して，観衆がよりよく鑑賞できるように，競馬場の周辺に有料スタンドを作るべきだと提案した。中国人の競馬に対する関心の高まりに応じて，競馬に関する報道を増やし，1911年までに競馬記事の総数は482件に達している[2)]。そして，一般民衆だけではなく，『申報』のような社会世論を導く作用を持っている主流メディアも競馬に熱中していることが十分に知られる。

他に，1876年に葛元煦が書いた『沪游雑記』に掲載される「賽跑馬」は近代競馬の研究にとって重要な資料だと言える。

> 大馬路西，西洋人辟馳馬之場。周以短欄，所以防奔軼也。春秋佳日，各賽跑馬壹次。每次三日，午起酉止。或三四騎，或六七騎，衣則有黄，紅，紫，綠之異，馬則有驪黄，騮駱之別。並轡齊驅，風馳電掣。場西設二廠備校閲，以馬至先後分勝負。第三日增以跳墻，跳溝，跳欄等技，是日觀者上自士夫，下及負販，肩摩踵接，後至者幾無置足處。至於油壁香車，待兒嬌倚者，則皆南朝金粉，北裏胭脂也，鬢影衣香，令人真個銷魂矣。

また，清末の小説にも競馬に関する内容が見られる。例えば，『海上繁华夢』の第８回「看跑馬大開眼界　戲拉韁險喪身軀」がある[3)]。それらの多くの記述は中国人が外国人の競馬を理解するための重要な情報源になっていたと考えられる。

『点石斎画報』が創刊されて以来，外国人の競馬に大きな関心が寄せられ，毎年の春と秋に開催される競馬の日時やレースの予想，レースの様子，観客などについての内容が数多く報じられている。（「賽馬誌盛」「西人跑紙」「西人賽技」「賽船續述」「一蹶不振」「馬車墮河」「東塾宏開」「巾幗變相」「銅街走馬」「象怒殺人」「春郊鬥馬」「西童賽馬」「塗山鬥牛」など）特に，『点石斎画報』には競馬の盛況が文字に限らず，図像の形式として生き生きと描き出されている。それは以前の文章資料が競馬活動の諸相を具体的かつ可視的に示せない欠陥を補ってきた。同様に，「中国近代出版史における最初の日刊新聞」[4)] と言われている『図画日報』は競馬を注目を集める問題と見なしていて，「跑馬總會」「巡捕舉行秋秋賽」「寓滬西商跑馬之豪興」「看跑馬快馬車被捉之罰洋」「西人大跑馬跳浜之勇猛」「華人爭看西人跑馬之無謂」「團匪火毁跑馬厂」などの記事を通じて，豊富で多彩な競馬絵巻を読者たちの眼前に繰り広げている。そこで，『点石斎画報』と『図画日報』に掲載されている競馬活動の内容を中心として分析を行う。

競馬は毎年２回が行われ，春の４月下旬から５月上旬までと秋の10月下旬から11月中旬までに約３日

２）麦媛・大熊廣明・田原淳子，「上海租界における外国人のスポーツ活動に関する研究―『申報』（1872-1911）の記事分析を中心として」，2016年。

３）海上漱石生著，『海上繁華夢』壹·初集·第八回「看跑馬大開眼界 戲拉韁險喪身軀」，上海古籍出版社，1991年，74頁。「…自己到了初四飯後，與幼安在四馬路馬車行中叫了壹部木輪的皮篷馬車，這車價甚是便宜，連酒錢只花了兩塊洋錢，壹樣如飛的到跑馬場來。但見場上邊人山人海，那馬車停得彎彎曲曲的，不知有幾百部兒，也有許多東洋包車在內。車中的人，男的，女的，老的，小的，村的，俏的，不知其數。還有些少年子弟，坐著腳踏車在場邊兜圈子兒，瞧看婦女吊膀子的。又有些鄉村男女，與著壹班小孩子們，多在場邊搭著的木板上頭，高高坐著，真正看跑馬的。至於那些大人家出來的宅眷，則是坐在馬車上瞧，也有到泥城橋堍善鐘馬房洋臺上面出資觀看的人。這座洋臺，每逢春秋兩季跑馬，必招看客登樓觀看。第壹日，第二日每人收洋二角，第三日收洋三角。去的人卻也不少…」

４）馮金牛，『図画日報』序，環球社編輯部編。『図画日報』（第１冊）上海古籍出版社，1999年，４－５頁。

間である。競馬は概ね月曜日から水曜日までの３日間行われ，稀に週末と祝日に開催されることもある[5)]。『点石斎画報』（甲集）の第２号は「賽馬誌盛」を刊行し，競馬場と観客の両方の様子を余すところなく描き出している。

西洋人於春秋佳日例行賽馬三天。設重金以為孤注，捷足者奪標。焉其地設圍闌三匝，開跑跑時人則錦衣馬則金勒。入闌而後，相約並轡洎乎。紅旗一颭，真有所謂風入四蹄輕者。圍角有樓，西洋人登之以瞭望。一人獲雋，夾道歡呼。箇中人固極平生快意事也。而環而觀者如堵牆，無勝負之攖心，較之箇中人尤覺興高采烈云[6)]

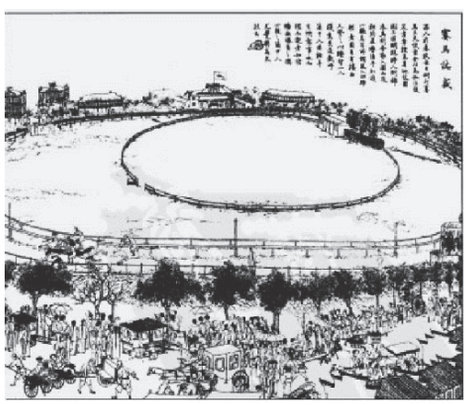

図１　「賽馬誌盛」『点石斎画報』

図（図１）を見ると，競馬場は３週のフェンスに囲まれて、３つの競技ルートが作られた。外側の普通のレースコースと違い，２番目のレースコースには溝，盛り土などの障害物がありそうな様子が伺える。画面の下に，立ったまま競馬を見ている人や車に乗って見ている観客を集中的に模写している。特に，その中には一般大衆が乗っている小型車があり，豪華で快適な馬車，黄包車もあり，当時上海の全ての種類の「車」が描かれていると言えるであろう。この図は競馬時期の賑やかな場面を示しただけではなく，当時の上海民衆の西洋大衆文化に対する憧れと情熱を表している。

当時の競馬の種目や方式は多種多様である。力とスピードの対決だけではなく，技術と難しさも重視している。平坦なコースを走る平地競走，障害物の飛越を伴う障害競走「跳浜」,「跳輪」があり，これ以外にも娯楽としての「跑紙」もある。『点石斎画報』（丙集）の「西人跑紙」にこの特別な競馬方式が記されている。原文は以下の通りである。

西人於春秋佳日必賽馳馬，以博輸贏。定例壹年兩次，每次三日，無多舉也。今年本埠秋後又添跑紙之戲，馬數少則十余匹，多則五六十匹，曾無限制。其法薈萃壹處，壹西洋人系囊於身，中儲五色紙條臨風壹撒，錦繡滿天，風力所向，紙條隨之而去，而群馬即視紙條之所指，絕塵而馳。其能冒過紙條之頭者為得彩焉。由靜安寺至法華，均有馬路，西人恒於此乘興雲

５）「賽馬日期」『申報』，1879年10月23日。

６）『点石斎画報』「賽馬誌盛 」（甲集），広東人民出版社，1983年６月，15頁。

また，『図画日報』の78，83号において，絵師は近距離から「競馬跳浜」の生き生きとした瞬間を細かい筆致で描いている。

寓滬西商跑馬之豪興

寓滬各西商。每届春秋佳日。於跑馬場有賽馬之舉。必在星期一二三等日。更於星期亦舉行跳浜以賈餘勇。於遊戲中寓尚武精神。非尋常遊戲可比。玆數日内。西人咸停止辦公半日。無不異常踴躍。其豪興有足多者。繪作是圖。并作跑馬曲。以志盛舉。（跑馬曲）今天天跑馬了。今天跑馬了。大家各把會場兒來到。會場上好熱鬧。會場上好熱鬧。耳聽得西樂兒聲高。眼看着國徽兒影耀。一霎間紅旗摇。一霎間鐵騎跑。唿喇喇一一個圈兒繞。是誰人奪標。是那馬最驍。駕贏家各人來脱帽。一天兒跑掉。再跑明後朝。好共把名駒賽幾遭。末天兒更有浜來跳。眞個是西商意興豪。况寓着尚武精神好。

西人大跑馬跳浜之勇猛

寓滬西商。每届賽馬之第四日。必有跳浜之舉。以盡餘興。場中開有小浜。各馬至此。皆一躍而過。仍以先到者獲勝。而跳時恒有一二騎人翻馬仰。跌入河中者。乃各西洋人畧無畏懼。甚或人甫跌地。此馬未經入水。即一躍而起。依舊逐隊馳賽。其勇猛一至於是。觀者咸爲心折。今日爲西商秋賽跳浜之期。因繪是圖。并戲仿采蓮格詩二首。請閲報諸君哂正。

図２　「寓滬西商跑馬之豪興」『図画日報』第78号

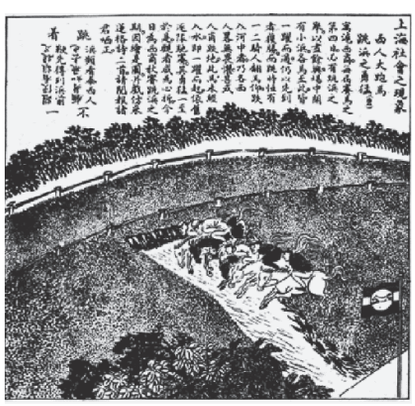

図３　「西人大跑馬跳浜之勇猛」『図画日報』第83号

この二つの図像を見ると，馬の四つ足の伸び幅だけでも，西洋人騎手が高速走行中であることがわかる。競馬場の道は平坦ではない，草の山のような障害物がありそうであるが，彼らは恐れず前方を見つめて全力で先を争っている。この景色はまさに見る者の心を沸き立たせた。画報に書かれた文章の最後の「眞個是西商意興豪。况寓着尚武精神好」を通じて，作者は西洋人競馬を非常に褒め称えた。頤安主人の竹枝詞「沪江商業市景図·大跑馬場」もこのような刺激的な場面と見る人の興奮する気持ちを反映している。

滬江商業市景圖·大跑馬場（1906）

頤安主人

跳浜已過跳花萁，鞍馬身輕慣疾馳。
引得遊人驚叫絕，歡聲雷動夕陽時。

なお，競馬はやはり危険性がある活動であり，試合中に騎手が仰向けになったり，馬がひっくり返ったりする場面もしばしば見られた。1896年に出版された『申江盛景図説』中の「賽跑馬」に書かれている「或有跌於馬下者，或有被馬踏傷者，時或有之，西洋人不足為異」は競馬競技の危険性を表している。『点石斎画報』の「一蹶不振」という記事もその一つの例として考察できる。

賽馬之記書者筆禿觀者興闌數見則不鮮習則聞生厭天下事大抵如斯也然賽馬一番事同而情跡容有不同者又不可以無言第三日以跳浜爲尾聲此次偷公事之餘聞邀同伴出門一應故事比至見衆人引領四望予亦逐隊仰觀茀見四馬齊出一黑色二深黃稍後者爲白馬數百步外每間一浜浜之沿堆積浮土若小阜阜上插花其如踈籬故謂之跳浜又謂之跳花萁也超躍而過即有有前後之不同而矯健寔相伯仲將及一周黑色馬屈前膝連人和馬陷泥淖中人名密司海昏不知人舁之而後歸噫賠了金錢殃及身當如周郎之氣死

一方，『図画日報』は宣統元年七月一日（1909年８月16日）に出版され，創刊の翌日（すなわち第２号）に『申報』と同じように競馬に関する内容を掲載している。原文は次の通りである。

図４　「上海の建築（二）―跑馬総会」，『図画日報』

西商跑馬總會，在靜安寺路之跑馬場，建築甚精。除春秋賽馬西人麕集外，平日若拍球角力，及操練西團，亦以此為燕息遊憩地。有賽馬俱樂部衛生浴池等管理其事者，為書記員嶽而生君，德律風二百九十壹號。巡西歷壹千八百六十三年以前，跑馬場僅有南面之曠地壹方，即現尚有節婦牌坊者是。初無如是之規模宏敞，逯後逐漸推廣，其地址始增至四百三十畝之多，而總會房屋亦高其闬閎，厚其墻垣，非常壯麗。說者謂西人辦事不特於遊戲中寓尚武精神且不惜經營締造若是，無怪租界之壹廣再廣，絕不稍遺余力也嘻。

「跑馬」の内容が『図画日報』に初めて登場したのは第２号の「上海の建築（二）―跑馬総会」である。（図４）この記事では跑馬総会の基本状況，外観や跑馬庁の発展の歴史が集中的に説明されている。この

記事には競馬現場の様子を生き生きと描写していないことで少し単調になっているが，『図画日報』の編集者は「跑馬総会」で競馬の指揮部を紹介してから具体的な競馬記事を掲載しようという思惑があったかもしれない[7]。また，記事の最後に「西欧人は財力を惜しまず建築を作り、それは租界何度も何度も拡大していくの原因ではないだろう」という感嘆が出てきた。

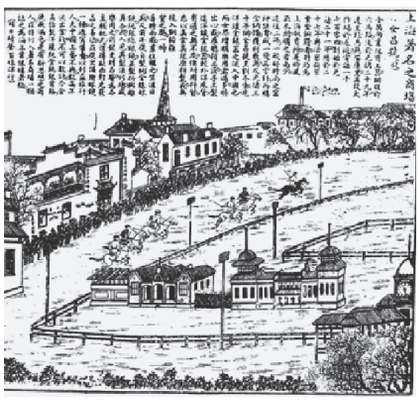

図５　「上海著名之商场―全昌号」

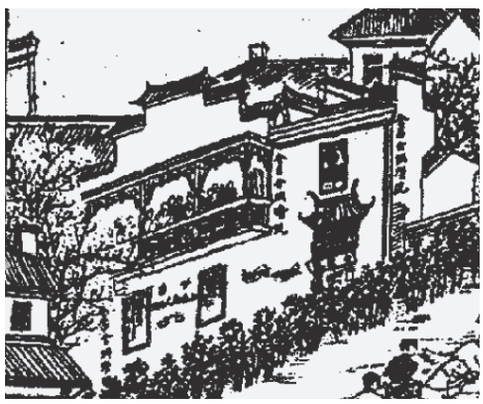

図６　「全昌号」の様子（図２の部分）

続き，『図画日報』の第６号に「上海著名之商场―全昌号」（図５）という記事が書かれており，内容も「全昌号」という宝石店の紹介である。しかし，この記事の図像を見ると違和感が感じられる。図像に描かれているのは完全に競馬場であり，「全昌号」という宝石店さえ見当たらない。よく見ると（図６），「全昌号」の看板が見える。また「全昌号」の２階には，多くの人々が並んで競馬を見ている様子がうかがえる。図４と見比べて，図５の右下の時計台と図４に描かれている跑馬総会は一致である。ここが間違いなく競馬場であることを表している。この記事の図像には，一方的に「全昌号」という宝石店を強調されておらず，競馬場の風景を描くことを通して，逆に店の場所を一目でわかるようにさせたのだ。これはまさしく競馬場の名声が高いことを説明し，店から直接的に競馬を見ることを売り点としても宣伝していると考えられる。

さて，競馬の文化が盛んであり，近代の競馬活動の基礎を築いた英国は，子供たちの競馬技術の教育を重視している。「學童二三十人復至賽馬場各騎駿馬按轡揚鞭頤盼自得迨至並駕而馳此呈罄控之能彼奏騰驤之技錦鞦過處電掣星馳」には，外国の子供たちが熟練した技術を持ち，意気揚々と競馬していることが書かれている。これは西洋教育が体育を重視することと決して切り離せない。これを通じて，画報の筆者は中国の伝統的な儒学教育と科挙制度における一部のエリートを養成する教育に対しての焦慮を表し，「此雖賽馬之常情而出之童子則我中國謝不敏焉此其人才之盛所由來也」[8] と感嘆したのである。

娯楽が多様化するに従って競馬に対する大衆の関心は強まっていった。そして毎年恒例の「西洋人競馬」の期間中に「逐隊往觀者，寶馬香車絡繹不絶」という光景が見られた[9]。ひいては「華人毎屆西人賽

7）許峰「空間視野下的“現代”上海―開埠以後上海都市文化的生発与嬗変」，2012年

8）「西童賽馬」，『点石斎画報』（元集）

9）「西人賽技」，『点石斎画報』（戊集）

馬，好遊者必結隊往觀，且有簇新其衣服，或飾其車輛，而與親戚故舊，或家人及所歡等偕往者，甚至世家大族，亦所不免，是豈不可以已乎」[10] と記載されたように，多くの人が競馬の日を盛大な祝日と社交の機会と見なして，彼らは新しい服を着て，馬車を飾って，家族を連れて一緒に競馬を見に行った。また，「滬北毎届西商賽馬之日。一班浮蕩少年及妓女等。毎喜包賃馬車。招揺過市。至跑馬場一帯。作憑軾之觀。歸途則令馬夫加鞭疾馳。個中人謂之爲出風頭。藉以炫耀途人。自鳴得意。」[11] では，妓女達がこの時に遊びに加わって，自分をひけらかしたがっていたことが伺える。さらに，『点石斎画報』（戊集）の「巾幗變相」に書かれた「閩垣於葭月初六日爲廁居各西人舉行賽馬之期至勒紛馳紅塵飛動錦標奪得顧盼自雄致足樂也時紅男綠女白叟黄童麕聚而觀幾致萬人傾巷有某院麗人破瓜年紀解佩風神牛時六寸膚圓絶無蓮步姍姍之態至此遂易爲男子裝束雲頭絲履欵步香香塵隨同甲乙二押客來觀。」では，競馬を鑑賞するためたくさんの上海住民が町を空にするほど出払い，中国の女性が足にまとわりついてきて，歩くのが不便であっても，男性に扮装して競馬を見に来る女性もいる様子が記述されている。

前述した「賽馬誌盛」の図像や『図画日報』に掲載されている「華人争看西人跑馬之無謂」（図７）の図に示されているように，競馬場は車と歩行者に囲まれて水も漏らさないほど密集している。競馬場の周辺には大勢の人がいて，賑わっている。しかしいっぽうで，観覧人数が多くなり，秩序を維持することが難しくなる。そして『図画日報』「看跑馬快馬車被捉之罰洋」（第80号）と『点石斎画報』「馬車墮河」（庚集）などの記事で競馬期間中に交通事故が頻繁に発生したことも見られる。

図７　「華人争看西洋人跑馬之無謂」『図画日報』

競馬を鑑賞すると同時に，中国人は西洋の競馬活動を自分の生活に溶け込ませて，模倣と改造を始めている。豊かな教養をもつ湘陰（地名）のある公子は「生平好馳馬雅有公奸段之豪興毎當清間無事常偕里中同志策款段公游」であり，光緒19年（1893）上元日に友達を誘って競馬をした。「限十里為度或先或後各逞罄控縱送之能載馳載驅大有春風得意馬蹄疾之景」，「頗類西商賽馬而特略變其例分先後而馳無勝負之別葢亦近時創見之一端」[12] では彼らの競馬が西洋商人の競馬に類似しているが，彼らが異なる時点で出

10）『図画日報』第79号，「上海社會之現象―華人争看西洋人跑馬之無謂」

11）『図画日報』第80号，「看跑馬快馬車被捉之罰洋」

12）「銅街走馬」『点石斎画報』（土集）

発し，勝ち負けもないところが西洋の競馬とは違うと示されている。このように清末中国の人々は西洋の競馬活動を受け入れつつ，西洋文化を認め，さらに西洋の近代的競技体育と中国の伝統的な文人文化を融合させ，徐々に「東西融合」の新しい娯楽文化形態を形成してきたと言える。競馬場の中で縦横無尽に駆け回る馬や競馬に熱狂する観衆の身から，開港後の上海社会の気風はすでに変化が発生し，ますます開放的，西洋化していったことを容易に見抜くことができる。

以上の論述から見てきたように，中国人は競馬の主体ではなく，ただ観客として競馬活動に対する情熱を持っていた。これらの西洋娯楽方式は上海民衆の生活を豊かにするだけではなく，彼らの西洋文化に対しての理解を深めさせた。中国人は競馬が外国人にとってレジャーの一つであり，中国の伝統的な娯楽活動よりも健康的で活動的だと感じていた。競馬は中国人の近代的なレジャー観の啓蒙に大きな影響力を持っていた。「中国人の伝統的なレジャー観は道徳面，形式面，礼儀作法面を重視していて，実際の効果は少ない。これとは対照的に，外国人はレジャー効果を重視している。官吏から一般の平民まで，すべての人が重視する競馬は生活を豊かにすることができるし，乗馬には身体のトレーニング効果もある」[13]，このように，『申報』は競馬などのレジャーが仕事の疲労と精神のストレスを取り除くなど，多くの功利性を持つことを認識し，人々の生活の質を高めていることを指摘した[14]。一方，当時の中国の歴史背景を振り返って見ると，欧米諸列強によって押しつけられ，半植民地的な不平等条約を背負って，清朝の政治体制の崩壊と中国民族の滅亡に瀕していた。上海の民衆達が西洋国家の実力を顕彰する競馬競技を見ることは，やはり富国強兵の民族祈願がその中に込められていると推測できるであろう。

第二章　観劇

1．サーカス公演

西洋から伝来した多様な娯楽活動の中でサーカスは動物を使った芸や人間の曲芸など複数の演目で構成されることが上海民衆を引き付けた。1862年に『上海新報』に掲載された「跑馬戲班」は外国のサーカスのが上海で演出したことの最初の記載である[15]。また、『上海指南』では、「滬上自通商后，西洋各種游戲技术。亦相與偕來。然其中可見真實本領者。莫如馬戲。馬戲演法。辟廣場。支大幕。高十丈。寬數畝。中為戲場其形正圓…有則必登報招客。價值亦無一定云」という記述を通じて、サーカスの公演形式や内容がイメージできる。さらに、1872年から外国サーカス公演の広告が頻繁に『申報』などの上海の新聞雑誌に掲載されるようになった。以下のように『申報』に掲載されたサーカス公演の広告を表にまとめた。

---

13)「紀西商跑馬」『申報』，1879年５月１日。麦媛・大熊廣明・田原淳子，「上海租界における外国人のスポーツ活動に関する研究―『申報』（1872-1911）の記事分析を中心として」から引用，22頁。

14)　同上。

15)「跑馬戲班」『上海新報』，1862年12月12日。「今有新到馬戲班，內有奇技異樣之法。並爬柱跳滾… 此班現到上海演戲…此班帶有外國吹鼓壹班，除馬匹外，另有男戲子七名，女戲子二名，外帶馬猴壹個。此猴已教過跪拜，並會做戲。又有壹戲子會淩空千金鬥，中國尚無人可及。… 每夜七點鐘開，八點鐘開演。」

表１　『申報』に掲載された上海のサーカス公演（1872-1910）

タイトル	開演期間	チケット代	場所
「外國男女馬戲物」	1872年５月－６月	頭等客位坐取洋一元 二等客位取洋半元 一等客位取洋二角半	江西路錦名洋行對門
「意大利國氣亞里尼馬戲」	1874年７月－８月	第一等椅兩員 第二等以氈鋪之椅一員　第三等椅五角 減価：包厢可容四客者每間洋銀五員 第一等位每位洋銀一元 第二待以氈鋪椅每位洋銀五角 第三等椅位每位洋銀二角五分	虹口順泰碼頭之隙地由黄浦路面進入 四馬路西首に移動
「新到西國戲班」	1875年３月４日		法租界之新寶
「新開馬戲園」	1876年５月６日	初位每客錢二百文中位每客 錢三百文上位每客洋半元	法蘭西大馬路西首寧波會館傍邊
「西國頭等馬戲 CHIARINIS CIRCUS」	1882年６月－８月	官座房可坐六位每房收洋十三元五角每單位如坐官房內收洋二元二角五 頭等校椅爲每位收洋二元 椅位有椅墊每位收洋一元 板位每位收洋六角 除官坐外各位凡小子未十歲 及兵家之未有頂帶者均收一半	虹口巡捕房後面文監師路及密勒路角上
「新到枝亞理尼馬戲」	1886年６月－８月	官座房可坐六位每房收銀十三元五角如有一客座官座處每位收銀二元二角五分頭等校椅位每位收銀二大元以上之位先買票方得入執此票者亦可入場内棚下椅位有椅墊每位收録一大圓板位每位收銀五角另有立看之處每位銀二角除宮座外各位凡小子末十歲者及兵家之末有頂帶者均收一半	虹口文監師路及密勒路角上
「車利尼馬獸戲」	1887年６月－８月	官房能坐六人者每房收洋十三元五角官房内如有一人要坐者每位收洋二元二角五分 第一等客位每位收洋二元 第二第客位每位收洋一元 板位每位收洋五角 高處立看每位收洋二角如有小孩來觀者除官房及立看之外各處皆收半價	虹口
「奥大利島馬戲告白」	1888年７月－８月	包廂設椅六位每間價洋十二元廂內每椅洋一元五角頭等客座每位 洋二元二等每位洋一元三等每位洋五角小孩十二歲以下者減半	虹口文監師路及密勒路角上
「倫白鴿奥國馬戲獸戲」	1888年12月－1889年２月	官房每間可坐六人取洋十元官房內各有一人要坐者每位取洋二元半　頭等椅位每位取洋二元二等椅 每位取洋一元板位每位取洋五角　立看者每位取洋二角五分	虹口南潯路
車利尼大馬戲班	1889年５月－７月	官房可坐客六位每間收洋十三元五角如有一人要坐此房者每位收洋二元二角五分頭等客位每位收洋二元二等客位每位收洋八角板位每位收洋四角小孩在九歲以内者除官房外俱收價一半	虹口

泰西客柳畫而門馬戲	1890年６月－８月	看客每位正桌二元二等座洋一元起碼五角 小孩在十歳以下者各減半 減價 看客每位正桌一元二等座洋五角起碼三角 小孩在十歳以下者各減半	虹口文監師路舊馬戲場 格致書院に移動
「日本東京戲班告白」	1891年６月18日－30日	官房每間能坐六位取洋十元不包定則每人 洋兩元頭等客位每人取洋一元五角 二等客位每人取洋七角五分 三等客位每人取洋三角	虹口密臘路及文監師路 轉角前年車利尼演馬戲 處
「哈驀司敦馬戲 COWBOYSPORTS」	1892年４月－６月	官房每間可坐六人者取洋十元如有一人要 坐官 房者取洋二元 頭等客位每人取洋一元 二等客位每人取洋五角 三等客位每人取洋三角 小孩照價取半	虹口彌勒路及文監師路 轉角上開演
「哈驀斯敦馳名馬戲獸戲」	1894年６月－８月	官房每間能坐六人收洋十元 一人坐官房其價二元 頭等客位 每位收洋一元五角 二等每位收洋五角 立看者每位收洋三角	虹口白大橋北首四川路 及文監司路轉角處空地
「新到衞司馬戲」	1896年６月－７月	廂房每位洋三元 椅位每位洋二元 坐凳每位洋一元 起碼每位洋五角	虹口百老匯路豐順 水手飯店對過戲場搭盖 蓬帳
「華倫馬戲」	1899年４月―５月	戲價官房每間坐六人者洋十二元如一人坐 官房則收洋三元頭等客位每人二元 二等客位每人一元 三等客位每人五角 四等客位每人三角 另設華婦坐位每人三角	虹口百老匯路 豐順水手館對面地上
「華麟美國大馬戲」	1902年８月３日－７日	官房能坐六位者每房洋十五元如一位欲坐 官房者洋三元頭等客位每位一元二等每位 五角三等每位三角再逢禮拜三六四點鐘准 演日戲意于減半	虹口百老匯豐順水手公 館對面
「詹得利印度馬戲」	1903年11月11日－16日		虹口西華德路及兆 豐路轉角
「新到俄國大馬戲」	1906年12月－1907年１月	包廂每間洋十六元 頭等每位洋三元 二等每位洋二元 三等每位洋一元 起碼每位大洋五角	英大馬路泥城橋西
哈姆斯登大馬戲	1909年５月－６月	包厢全包客六人座　每間洋十五元 頭等包廂　每位洋三元 二等包廂每位洋二元 邊廂每位洋一元 起碼每位洋半元 小孩每位減半	坭城外張家花園内

「白賽克大馬戲」	1909年９月－10月	包廂全包客六人座每間洋十五元 頭等包廂每位洋三元 頭等椅位每位洋二元 二等椅位每位洋一元半 邊起日戲廂每位洋一元碼每位洋半元日戲 十二歲以内小孩每位減半	上海坭城橋跑馬場對面

（線を引いているところが「Chiarini's Circus」の公演）

19世紀,「泰西馬戲獸戲向以車利尼爲獨出冠」[16], 西洋人が上海で開催していたサーカス公演の中で最も人気があるのは車利尼馬劇であるという記述がある。車利尼はイタリアの有名なサーカスの演技者であり,「天下の第一馬師」と名乗っていた。「車利尼」は「Chiarini's Circus」という英語の発音が音訳されたものであるため,「氣亞里尼馬戲」「枝亞理尼馬戲」「車利尼馬戲」「車尼利馬戲」というようないくつかの言葉で『申報』や『点石斎画報』に記されている。しかし,「Chiarini's Circus」が何回上海に来たのかについては明確に記載されている資料が見つからなかった。1889年『点石斎画報』に記されている「車利尼馬戲於今三至滬」[17] によると,「Chiarini's Circus」が上海で３回演出したことが広く認められていたとされる。だが,『申報』を見ると,「Chiarini's Circus」が最初に上海に来たのは1874年である。「本斑之大賬亭現設立在虹口順泰碼頭之隙地由黄浦路面進入也總理主人名氣亞里尼經理人名德嗎擬於本月二十日開演其所演各事皆娛目悦心足爲共賞之新戲」では, 支配人の名前「氣亞里尼」が明確に書かれており, 表にまとめられたような1874年, 1882年６月－８月, 1886年５月－８月, 1887年６月－７月, 1889年５月－７月の『申報』の記述から「Chiarini's Circus」は少なくとも５回は上海に来たことが確認できる。

『申報』によると, 1874年「Chiarini's Circus」が最初に上海に来た時は,「著名優伶二十五人練習駿馬三十匹並帶得瓜納可國一猿亦善演劇爲别戲園所從未有者」であり, 出演者は25人, 動物は馬と猿だけである。1880年代になると,「Chiarini's Circus」は演出と内容を絶えず新しくして, より一層の人気を博した。「其演馬戲也, 能於馬背上作秋千之舞, 絕塵而馳, 不壹顛蹶；馬戲之外, 又有虎戲…」[18] と記されたように, 車利尼馬戲班が1882年上海に来た時に「所演各戲, 與前不同, 花樣翻新, 異常生色」[19] と強調し, 上海で２か月以上連続公演し, 中国人や西洋人が大勢で見に行き, 大きなセンセーションを引き起こした。『申報』では「馬戲再誌」「馬戲三誌」「馬戲四誌」「馬戲五誌」「馬戲六誌」「獸戲述奇」を連日で報道し,「Chiarini's Circus」の公演を絶賛した。『申報』の主筆者黄式権は1880年代に何度もサーカスを鑑賞し,『淞南夢影録』の中で1882年の車利尼馬劇について素晴らしい描写を残した。

> 先是二西人立騎馬背, 駛行池中。忽縱身壹躍, 則馬已互換焉。繼而壹人躍登騎馬者之 頂, 疊登六人, 高與屋齊, 而馬不停蹄, 人不顛蹶。又二人拉壹白布横亙臺上, 馬由布下馳過, 人則躍從布上。連躍數次, 累黍不差。…忽壹女子怒馬突出, 口銜卅余鎊之銅炮, 攀機壹發, 石破天驚, 而炮仍不墮,

16)『申報』, 1903年４月24日。

17)「觀西戲述畧」『点石斎画報』（巳集）

18)「小駟傷人」『点石斎画報』（己集）

19)「西國頭等馬戲獸戲」,『申報』1882年６月24日。

其齒力真不可以數計矣。壹人以帕埋土中，牽壹馬至，附耳與語，馬即以前足掘土，銜帕而出。又壹人引兩馬於池中，其馬善解人意，命之坐則坐，命之立則立，命之鳴則鳴。未後四人拉壹大鐵籠出，籠畜二虎，壹黃壹黑。黑者猶猛，大聲怒吼，聲震林木。有長生者，能入籠中，使演諸劇，虎皆貼耳垂頭，略不奮怒。

黄式権は観衆の一員として車利尼馬戯のすばらしい演技を生き生きと描写し，側面からサーカスという外来の娯楽項目の観衆の驚きと好みを表した。

1886年５月，車利尼馬戯班は上海に来た時，『申報』に「枝亜理尼（注：車利尼）は大理亜注：イタリア国における第一の馬戯獣劇を演じ，極めてにぎやかで，美しく，巧みである。」という広告を掲載した。かつ，『点石斎画報』には「車尼利馬戯至申自四月十九夜開演以迄於觀今者引類而呼朋談者眉飛而色舞其所演種種名目本埠日報已詳言之不必贅語顧是戯有正劇有雜劇馳馬也調獅也搏虎也令人心悸令人神驚是謂正劇翻損也鑽圈也擲帽也走索如三上吊合抱如兩頭人中人同聲曰奇西洋人擊掌為樂是謂雜劇若夫體擁腫而歩蹣跚麗然自大其蠢無比者象也然而鼻之為用能吹銅角能韻胡笙具見性」[20] の報道があり，同様にサーカスが開演する時のにぎやかな場面が描かれた。図（図８）を見ると，その時のサーカス公演は馬と猿だけではなく，象の公演もあったことがわかる。1887年，車利尼馬戯班の代理人威路臣は『申報』に以下のような広告を掲載した。

啓者本班日内將至上海定於本月十九日在虹口從前演過之處開演本班於去處往東洋後已添雇男女名優多人其馬上各技格外新奇…

ここから見ると，車利尼馬戯班は多くの出演者を招いて，前よりさらにきらびやかな公演をするようになったことがわかる。『点石斎画報』では1887年の車利尼馬戯班に関する記事があまり見られなかったが，「瘋象奪門」という記事の中で「嘗偕友人觀演車利尼戯見二象跳躍圈内進退指揮悉如人意」[21] を通じて車利尼戯に対しての称賛の意が表された。1889年『申報』には「赴外洋各處開演所到之地新添伶人及各種鳥獸均是歐洲美國上等人物現又將到上海開演看客必覺卽觀較勝從前」「看客每晚甚多中外男女老少皆乘香車自遠而至」[22] という内容が見られ，また，「車利尼馬戯於今三至滬游觀者衆矣然此人見所例之他人不必其從同今日所見例之他日亦不必其從同然則既見而爲所未見者仍不少也本月十二夜月明如水氣爽疑秋偕吳君友如往歸途謂予曰此戯繪圖者屢矣人欲續之毋乃蛇足乎雖然不可以不續也戯無盡藏日新而月異而晝因之以成結搆者亦不犯重也未見者如良覿已見者證前遊鴻爪雪泥聊存梗概云爾特繪圖如左」[23] では，車利尼馬戯班が３回上海に来て，これをテーマにした作画者が数え切れないほど画像を描き出したが，サーカスの内容が豊富，演技の形式も多様で，日進月歩であるため，画報に掲載された内容も異なるわけ

20）「西戯重來」『点石斎画報』（庚集）
21）「瘋象奪門」『点石斎画報』（丑集）
22）『申報』1889年６月７日。
23）同141。

であったと記述されている。そこで，『点石斎画報』の絵師呉友如は「直上干霄」と題された図に細かい筆致で描き，演技の場面を直接的に浮き彫りにした。

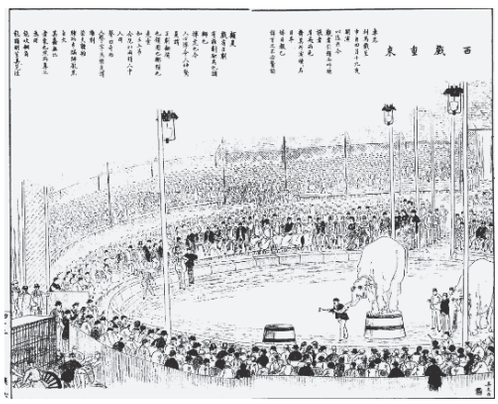

図８　「西戯重來」『点石斎画報』（庚集）

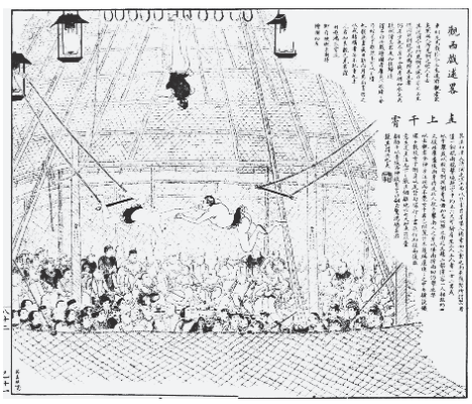

図９　「觀西戯述畧」『点石斎画報』（巳集）

さて，車利尼馬戯のチケット料金や観劇人数をめぐり，当時の上海民衆が外国のサーカスをどのように見ていたか，そして外国の娯楽文化がどのように彼らに受容されていったのかを考察してみたい。車利尼馬戯は1874年から1889年まで５回ほど上海の虹口地域で上演した。通常の開演時間は夜の９時からである。チケットの価格は席の等級により異なる。一般的には，個室は一人約洋13元５角，特等席は洋２元，二等席は洋１元，三等席は洋６角，自由席は洋２角，子供は半額である[24]。1874年車利尼馬戯が初めて上海で上演した時に関して，『申報』に以下の記述がある。

前夜虹口西國馬戯於九點鐘開演初時人尚寥寥少選寶馬香車絡繹奔赴如潮如海翹首爭觀…

「虹口西國馬戯述異」1874年７月９日

今氣亞里尼馬戯自虹口移帳至四馬路西首蓋以便華人就近以觀也又將各價減半好奇選勝之士當必摩轂擊而往之矣

「馬戯遷移」1874年８月３日

これより，車利尼馬戯が初日に上演した時には観劇者はそれほど多くなく，「寶馬香車絡繹奔赴」による観劇者はやはり西洋人や貴族商紳という社会の上層階級に限られていたことが想像できる。また，車利尼馬戯はおよそ１か月後に「以便華人就近以觀」のため四馬路に移動し，さらに料金を半額にしたことによって，最初に車利尼馬戯を見に行った人々が予想に比べて少なかったと推測できるだろう。また，「近日觀者益復增多坐無隙地」[25] と，1882年に車利尼馬戯の観衆はさらに増えたことが記述されている。「又慮寒儉之人不得以半元一元之費一豁眼界因於椅位之後再拓地一區俾若輩出洋二角亦得寓目但立而不

24）『申報』，1882年。表１にまとめられる。

25）「馬戯增獸」『申報』1882年７月29日。

坐且其出入另闢一門不與同門進出」[26]「因有許多華人住居遥遠婦女小孩晩間不便來看商請本班於日間開演一天得以娯目聘」[27] では，多くの中下階層の民衆達，特に都から離れたところに住んでいる人々も「眼界を開く」ために車利尼馬戯を見に来たと記されている。1886年には洋一角で車利尼馬戯を鑑賞できるようになった[28]。しかしながら，彼らは低価格のチケットしか買えなかったため，出入口は他の客と区別されていた。また，彼らは遠いところで立ってまま観劇しなければならなかった。

サーカスの演技が増えたとともに，異なる段階のチケットが出現したが，全体のチケット価格は次第に下がっていく傾向が見られる。なお，画報に描かれた通り，前の席に座っているのは眼鏡をかけてきらびやかに着飾る貴族紳士達や礼服を着てシルクハットをかぶっている西洋人ばかりであり，素朴な服を着ている社会の中下層民衆は少し離れたところで立っている。（図10）言うまでもなく，座席の位置を通じて異なるタイプの消費に「身分確認」を確立し，席の等級を分けることによって異なる社会層の消費者のニーズを考慮し，富裕層以外の上海民衆もサーカス公演を鑑賞できるようになっており，サーカス公演の大衆化プロセスが推進されたことがわかる。

図10 「圉城格外看馬戯之興會」『図画日報』

他に，「飛鳥依人」「女将操演」「西女蹴鞠」といういくつかの画報を通じて，外国女性がサーカスに出演している場面を描写している。外国女性の勇猛さと豪快さを余すところなく表現し，中国の伝統女性が深窓の奥ゆかしい雰囲気を纏っていることとは対照的である。文字においても，画像においても，彼女らの勇敢な精神を高く評価しつつ，外国文化の男女平等思想を讃頌していたことがわかる。

外国女性の娯楽活動は職業教育，女性解放といった社会運動に比べて，知らず知らずのうちに中国女性の生活様式と思想観念に影響を与えた。『点石斎画報』の外国女性のサーカス公演を多く展示している図像の中で，外国女性は主導的な「出演者」であり，図像の中心的な位置を占めていた。なお，中国の女性は「視聴者」として図像の隅に隠れていた[29]。しかし，これらのごく一部の中国人女性がサーカス公

26）『申報』，1886年５月21日。

27）「新到枝亜理尼馬戯」『申報』，1886年６月２日。

28）「車利尼馬戯獣戯」『申報』，1886年６月25日。

29）冯鳴阳，「上海『点石斎画報』中外国女性娯楽活動」，『創意與設計』，2016年，73頁。

演の現場で観劇したことは，中国女性が西洋の娯楽活動に参加したことを表している。特に，女性が家にひきこもるべきで，女性は勝手に人前に現れることも，社会の公共活動に自由に参加することもできないという状況が変わり，伝統的な男女観念が覆ったことは上海社会にとっても革新の意味があると言える。画報の中で表現されるように，1860，70年代頃には，女性が遊びに出掛け，従来男性のみが出入りする茶館や劇場などの公共的な社交場に出ていくことが次第に流行していったとされ，1880年代になると，このことが上海では普通に見られる光景となった。要するに，外国の劇場の流行が当時の社交形態にも変化をもたらし，社会風俗の開化にも一定の作用を与えたと言える。そのため，ある中国の男性は『申報』への手紙でこう書いている。「不徒願壹須眉男子獨樂其樂，並將使吾眾巾幗共樂其樂；不徒攜我家婦女與少樂樂，並欲邀同人婦女與眾樂樂。」（男が一人で楽しむだけでなく，多くの女性も一緒に楽しめるようにしたい。私は親族の女性，少数の女性と娯楽を楽しむだけではなく，多くの女性を招待して，皆と楽しみたい）[30]。西洋娯楽文化の影響で，男女が平等な娯楽権力を持つという進歩的な観念が徐々に上海の民衆の心に染み込んでいったことがわかる。

要するに，当時の新聞や画報に掲載されていた大量の外国サーカス公演の報道は，上海の民衆達が外国演技を「見る」過程や西洋娯楽文化が民衆の「生活世界」に入る過程を展示しただけでなく，外国サーカス文化の伝播と視聴者の娯楽観念を構築する上で，極めて重要な役を果たしていたと言えるであろう。

図11 「西女蹴鞠」『点石斎画報』

図12 「飛鳥依人」『点石斎画報』

2．「幻灯影戯」

19世紀になると、幻灯はプロテスタント宣教師の「科学宣教」の重要な道具として中国全土に広まり、幻灯の講演やスライドは近代知識を表現する重要な媒体となった[31]。19世紀から20世紀まで幻灯についての広告や記事も『申報』にたくさん掲載された。

「影戯燈出售廣告」，『申報』，1874年１月30日

現新到影戯燈一具，山水人物玻璃畫片百余張，率皆鮮妍美麗，活動欲生。

30）「與眾樂樂老人致本館書」，『申報』，1874年１月13日。

31）孙青，「魔灯镜影：18-20 世纪中国早期幻灯的放映、制作与传播」，『近代史研究』，2018 年第４期，66頁。

「観演影戯記」，『申報』，1875年３月26日

…此戯由泰西來此久，不開動故致滯塞及演過數大便覺生動。至基內燈光雖由電氣所引然必與煤氣相合，乃能照耀逾常。中國煤氣較外國高一尺，有奇初演時氣不相治，故致暗昧耳…

「西洋影戯」，『申報』，1875年５月１日

西洋影劇頗堪悅目，看法用射影燈一盞，對准其光，使乎射粉壁上將有戯法玻璃片正燈單前逼光得影作壁上觀，其上人物具備五色繽紛極惝怳離奇之致…並有中國東洋諸戯式與本埠各戯園所演無異，其中景象逼視皆眞，惟是影裏乾坤幻中之幻殊令人歎可望不可卽耳。

「萬花樓書館電戯」，『申報』，1889年10月20日

美國初次新到各邦奇景照集，指掌火楚雪壓異禽怪獸警心飛舞星斗燈彩移動隱現賽馬爭勝飛馳迅速技藝險彩如生如活，數百餘景筆難盡…

以上の資料によると，最初の西洋影戯は、画家が描いたガラスの絵を特別な照明器具を通して壁に投影して見せるものだとわかる。この特別な照明器具には電気やガスが必要なので，当時には「電戯」とも呼ばれていた。「観演影戯記」という記事において中国と外国のガスは違って，影戯の放映効果に影響されたと記されている。西洋影戯は中国に伝来された最初，放映場所，内容と放映技術などが制限されると推測できるだろう。

西洋の幻灯影戯は中国の上海などに伝来した後，最初の宣教の役割のほかに，主に教育と娯楽の二つの役割を果たした。教育的性格をそなえた幻灯影戯は，教会や学校で使われるほか，公共の上映を通じて、大衆を啓蒙する役割も担っていた。例えば，上海の格致書院、中西書院などはよく幻灯を使って西洋科学の「格致の理」を説明する。これら新式書院の幻灯影戯講演は大衆に開放され，ともすると数百人の聴衆を前にして行われた[32]。

「光緒十一年十月望日之夜，顏君永京出其遍歷海外各國名勝畫片，為影戯於本埠之格致書院。與觀者人輸洋蚨五角，集貲全數賑兩粤，山東各沙洲災民。其盛德也圖凡一百数十幅」[33] によって，聖公会の宣教師である顏永京は兩粤，山東などの地域の自然災害を支援するために，1885年11月15日に格致書院で世界各地の名勝風景が展示される幻灯講演会を開いた。続き，1885年11月23日『申報』の「影戯助賑」[34] によって顏永京吳虹玉は前日行ってきた震災支援の幻灯影戯パフォーマンスが大きな成果を上げたため再び11月23日の夜に公演を行うと報じられた。さらに，12月３日の「影戯翻新」[35] を通してこれまで顏永京吳

32）同上，83頁。

33）「番輿異製」『点石斎画報』（己集）

34）「影戯助賑」『申報』，1885年11月23日。原文：顏永京吳虹玉兩善長痌瘝在抱，於本月十五晚特設西法影戯在格致書院開演，所得戯資悉數充賑。其中精美奇異變化無窮，誠爲巨觀，卽英德法美日本等處京都及沿途名勝地方，如在目前不啻身歷其境聞今晚再行續演，務乞各仁人聯袂而起於賞玩之中寓賑恤之意功德無量，謹誌之並代災民百拜叩首道謝。

35）「影戯翻新」『申報』，1885年12月３日。原文：顏永京吳虹玉二大善士顯現影戯集資助賑舉行三次觀者如雲二君好善情殷不辭勞瘁定於今晚及禮拜六晚復在老巡捕房對門震源舊址重演是戯其價每人減收三角戯則另換新奇一洗雷同之弊諸

虹玉の震災支援ための幻灯影戯パフォーマンスもう３回行われ大好評を受けたため，今夜再開するとわかる。なお，これまでの幻灯講演会との違いは次の点である。まず，目的は違う。これまでの幻灯影戯パフォーマンスは震災支援のために行われた。集まったチケット代金も全額寄付する[36]。今回のチケット代は前より三角銭安くなり，ただ民衆達を楽しませるのが目的であった。また，放映場所は格致書院から福州路「老巡捕房對門震源舊址」に変わった。最後，今回の幻灯スライド内容も以前と違った。これらは，幻灯が民衆の視界に入ると，たちまち人気と評判を呼び，それが広まるにつれて、娯楽としての性格が徐々に拡大されていったことを示している。

民衆達はこの西洋の精緻な機械を通じて世界風景を鑑賞すると同時に科学知識を得た。その時に上演された幻灯と会場の模様は一連の作品として『点石斎画報』に掲載された。己集の「影戯同觀」には顔永京は幻灯講演会を行われた様子が描かれていた。（図13）この図像から見ると，「影戯助賑」という文字が書かれた提灯は天井にかかげられている。『申報』の記事によると，場所は格致書院だと推測できる。

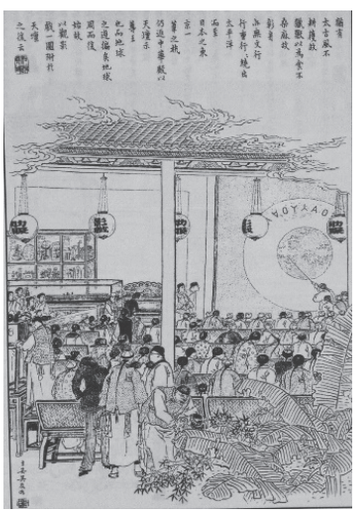

図13 「影戯同觀」『点石斎画報』

図13―局部１

図13―局部２

また，今回の幻灯影戯パフォーマンスを仕上げた２人の重要な人物も図像に描かれている。一人の男は清朝の伝統服飾を着って立ったまま幻灯映写機を操作している（図13―局部１）。もう一人は演説台の中心に立って，スクリーンに映し出された地球の幻灯を解説している。（図13―局部２）『申報』の記事「影戯助賑」の内容と一致しているが，この図像に描かれている二人のうち、どちらが顔永京であるか，どちらが吳虹玉であるかについては明記されていなかった。当時上海聖公会の宣教師である顔永京と吳虹玉は中国の伝統衣装を身にまとい，最新の幻灯机械を利用し，身をもって上海の民衆に科学知識を説き、世界各地の風物を紹介した。科学知識の伝授を少数のエリート階層の人々に向けるから全社会の大衆に向けるのに転換させた。先進的な思想や技術もこのような隙間から中国の伝統世界に入り込んでいた。

君子能從我游乎請於七句鐘時移玉早臨爲幸。

36）「上海四馬路高易公館協籌兩廣山東沙洲賑捐所經收十二月十七至二十五等日賑災清單」『申報』，1886年２月10日。「顔永京吳虹玉共集影戯洋二百七十九元三角」と記された。

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて，幻灯影戯は上海、北京などの大きな町の大衆娯楽形式の一つとなった。『図画日報』に当時の幻灯影戯を上映した劇場「内」と「外」の様子がうかがえる。（図14，図15）「西洋人有電光影戯。固絶無聲息之美劇也。乃觀於四馬路之各影戯場則不然。有雇用洋鼓洋號筒者。間亦竟有用中國鑼鼓者。喧譁之聲。不絶於耳。是與西洋人適成一反比例也。」[37] によって，当時中国内地に伝来した西洋の幻灯影戯は主として音のない無声映画であったが，当時の中国観客は、それと一緒に輸入されるべき映画のマナーを、完全には受け入れていなかったのである。彼らは中国の伝統的な演劇を見る時の習慣を引き継ぎ，観劇の中でもお茶を飲んだり，お菓子を食べたり，友人と笑いながら話し合っていた[38]。劇場外の光景も同様に賑やかである。劇場の人は宣伝するために何かの芝居を演じているようで，多くの人々が集まって混雑している。かごの中に座っている令嬢もこれを見るために思わず顔を出した。中国の民衆は好奇心を持って西洋の幻灯影戯を接し始めたが，その後ろにある思想や文化を深く受け入れるにはまだ長い過程があったと言えるだろう。

図14 「営業写真－做影戯」

図15 「四馬路影戯之喧嘩」

第三章　ほかの娯楽種目

上述したものに限らず，スポーツ競技，音楽会，絵の展示会等のあらゆる娯楽活動は時代や社会の変遷と共に上海で展開されていた。西洋人の体育競技中で盛大で勢いのある種目としては競馬以外にも競船がある。競船は競馬と同様に，試合が行われた時に見に来た人々がきわめて多かった。1872年10月27日の紙面に掲げられたように，「中西觀者如堵，擁擠異常，與觀斗馳馬時然。」[39] である。『点石斎画報』において次のような文章で具体的に競船試合の様子を描いた。

37）「上海社会之現象－四馬路影戯之喧嘩」『図画日報』第36号。

38）Xiao Zhiwei, “Movie House Etiquette Reform in Early-Twentieth-Century China” *Modern China* 32, no 4, 2006, p516.

39）『上海通史・晩清文化』，上海人民出版社，1999年，13頁。

「西人賽船」

西人於春秋佳日例行賽船之舉設重金爲孤注分先後爲勝負以視雅歌投壺擊劍彈棋諸游戲懸宵壤矣然而短櫂雙飛疾若穿簾之燕扁舟一葉輕如狎水之鷗出没於洪濤巨浪中雖濡首沾裾而不悔箇中人固興高采烈而旁觀者亦歡呼夾道舉國若狂焉東坡有云譬人嗜葛歜羊棗未易詰其所以嗜者我於西洋人賽船示之

「賽船續述」

西人賽馬以嬉年必兩舉舉必三日相沿已久賽船則前此未聞今又行之數年矣十六十七兩日在本埠老閘河中西洋人名之曰蘇州河自東訖西約三五里賽時自二船以迄於四船六船不等人則或三五焉或五六焉以船配人務求相稱惟並賽之船與人則則大小多寡必相埒無差池尾隨小火輪二艘竭火輪之力不能突過其前則亂濺鷗波處正輕飛鷁首時也如弦激箭若風送鳶雖曰嬉遊亦極能事[40]

上述したように，競船は西洋人の娯楽活動であるが，中国民衆の大きな興味を引き起こした。「中西觀者如堵，擁擠異常，與觀鬥馳馬時然。」[41]（中国と西洋の観衆は多くて，非常に混んでいる。競馬を見る時と同じ状況である。）西洋の大型の娯楽活動として，競船は中国人の視野に入りやすいと言えるだろう。実際，西洋競船は中国の「賽龍舟」と非常に類似する。「賽龍舟」は中国の端午節を祝うための伝統文化活動であり，『上海県誌』によると，黄浦江，七寶，閔行，嘉定，松江，南匯などで毎年の５月に「賽龍舟」を行っていた。そして競船は上海に伝来されて以降，中国の伝統的な祭りの雰囲気に染まっていき，自然に上海民衆の日常生活に溶け込んでいった。1893年上海開港50周年に，中国の「龍舟」と外国のボートの試合を行ったことは中国民俗と西洋文化の素晴らしい融合の結果となる[42]。また，中国の伝統節日は農業文明の発展に伴う産物であり，中国人が自然に順応した生活様式が表現されている。伝統節日は信仰，競技，社交，娯楽の様々な機能が一体となり，中国人の心身を休息させ，情緒を発散させ，感情を疎通させ，群体を凝集させる一種の方式である。競船のような西洋の娯楽活動は集団性，凝集力があり，感情を発散でき，かつ賑やかな雰囲気を持つところは，中国の伝統的祝祭日を祝う活動と同様である。だからこそ，競船は中国民衆に受け入れられやすかったと言える。

体育活動は最初に娯楽手段として上海の租界に出現したが，すぐに功利的な性質を持った。スポーツは商業のために利用され始め，人と付き合う手段や身分地位が象徴されるものになった。『点石斎画報』に掲載されている「西洋人抛球」（図16）と『図画日報』に載せられている「泅水会」（図17）には一般民衆が入れない密な運動空間で西洋人が小型のスポーツ活動を行うことを典型的に描いている。

本埠西商。於西歷九月六號。即中歷七月二十二日。禮拜一舉行泅水會。凡世界泅水倶樂部之會員。均須泅水以爭優劣。亦尚武之一端也。

40）「賽船續述」，『点石斎画報』（戊集）

41）『上海通史・晩清文化』，13頁。

42）郎净，『近代体育在上海』，上海社会科学院出版社，2006年，24頁。

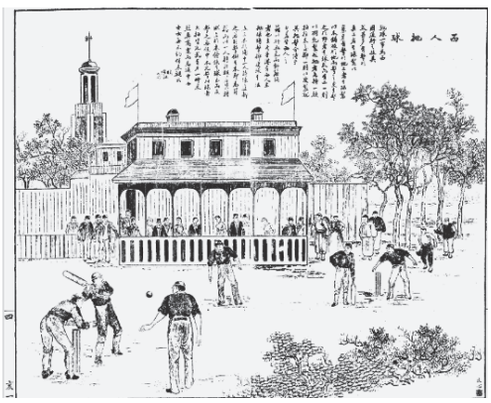

図16 「西洋人抛球」

図17 「泅水会」

また，「树叶能行」の中で香港の「公家花園」で開催された植物展覧会が描かれているが（図18），画面に出現した人物はすべて西洋人である。実は，外灘公園が1868年に完成する前，中国には現代的な公園がなかった。最初に外国人が中国で設立した公園は，外国人と少数の上層階級の華人だけに開放されていた。上海一般民衆にとって遥か遠い西洋の娯楽活動が画報の中に収められ，読者たちの視野を広げたことは言うまでもない。また，「树叶能行」と類似している報道「雅集名蕙」（図19）がある。背景にある「豫園」で毎年恒例の「蘭蕙會」が三日間開催される[43]。「豫園」は代表的な私有園林として，歴史的に重要な祝日にならなければ，公衆に開放されない[44]。画報の作者は豫園の描写において，伝統的な服装を着ている男女がびっしりと展示場所を満たしていた場面を選んだ。人の流れは画像の左上の角廊口から殺到する勢いで画面の中心にまで流れ込んでいた。これは娯楽としての大衆的需要が表現されながら，一般民衆達が外国人と社会上層階の人々に区別された時に芽生えた民主，民族精神を反映している。

図18 「树叶能行」『点石斎画報』

図19 「雅集名蕙」『点石斎画報』

43）『上海指南』に、「二三月間。邑廟豫園有蘭花會。一干一花香有余者為蘭。一干一花香不足者為蕙。滬俗則蘭蕙并重…」という記述がある。

44）『図画日報』第５号「上海之建築（五）内園」：内園亦名東園。係明潘庵允方伯豫園故址之一。今爲城隍神寢宮…按是園于嘉慶十二年始由錢業借設公所。同業有事。于此集議。故園中修葺一切。俱由錢業醵資。平日園扉双閉謝絶游人。惟令節及蘭花菊花等會一啓焉。

終わりに

以上のように，西洋娯楽活動の興行に伴い，清末の社会生活には一連の新しい変化がもたらされた。これは中外文化交流の発展の一つの結果である。さらに，新しい社会文化の特質は，物質生活を重視することや社会平等を求めること，また女性の社会進出といったことを促進した。長い歴史を持つ西洋の競馬競技，外国人と思しき興行師「車里尼」によるサーカスや奇園で行われた洋画展覧会，福州路の劇場での映画などに触れ，これらの演目が新鮮で耳目を喜ばせるに足る「娯楽」であると評価できる。また，「中国の伝統的な田舎生活は娯楽の空間が限られて，重要な祭りには一般に宗祠のような場所が臨時の娯楽場として使われ，常設の公共娯楽施設が少ない。」[45] に対して，『点石斎画報』と『図画日報』の中の西洋人が公共の娯楽空間を利用して祭りを行った報道を通じて，読者の公共空間に対する認識も高められたであろう。

幻灯と映画は中国の伝統的影絵劇に類似し，両者は本質的に雑技のような遊芸番組に属していると思われるが，それぞれ「西洋影戯」と「電光影戯」と呼ばれていた。このような言葉遣いは中国人が西洋文化の積極的な意義を認めなければならないが，心の奥底にある中国の文化優越感や伝統文化の尊厳を維持したいという感情を表した。他の「泰西風俗毎多近古，即如歌吹之聲多重濁而少輕清，此即黄鐘大呂之遺響也；舞時歩武疾徐踴躍先後各合節奏，此即綴兆進退之儀文也。……至於賽馬，賽船以及溜冰，抛毽之類，皆有所取義而足以暗合於中國之古人」[46] に示されたように，中国と西洋の文化の相違に対する認識は，共時性の横方向の比較を行っておらず，中国の昔の盛世と現在の西方を比較することによって歴史上の縦方向の文化の比較に関心を持ったことは一目瞭然である。なお，西洋の娯楽活動が中国に昔からあるという観念は，伝統文化の自信を強化しようとし，民衆が西洋娯楽に参与する中で文化の一体感を探させるということが考えられる。

しかし，「価値観から見ると，新しい娯楽観念は道徳に重きを置いた伝統的な価値観と比べて，より多くの功利主義の色彩を持っている。これは近代商業化都市化の生活様式の変化に適応した結果生じたものだった。」[47] と指摘されたように，西洋娯楽が自らの優越性を示した後，ますます多くの一般民衆はこれに対しての認知が驚愕や好奇から追求，享楽と模倣にまで変化し，自主的な選択，吸収，融合の積極的な態度を示すようになる[48]。新しい娯楽形式も、近代上海の資本主義経済の発展のニーズに合い，新しい思想を受け入れる多くの人々の精神的な追求のニーズに合い，新しい文明形態の発展のニーズにも合っている。なお，「感覚器官の上の「奇術淫巧」はまさに西洋娯楽活動の「売り物」となったのである。こういう娯楽活動は伝統文化の辺境地帯にあり，儒教文化の教化を体系的に受け入れておらず，複雑な道徳的負担は存在しない。」[49] したがって，「新式娯楽」は中国の伝統道徳論理に組み込まれていなかったため，ある程度人間の欲望を解放したと評価しているが，一部貴族や豪商階層の人々が盲目的的に享楽主義と消費主義を追求して，後日上海の功利主義の気風形成に悪い影響を与えた。

45）马薇薇，「『申報』視野下的晩清上海娯楽生活」，『东南传播』，2013年第５期，123頁。

46）「泰西風俗」『申報』1899年８月17日。

47）李長莉，『晩清上海社會的變遷』，天津人民出版社，2002年，283頁。

48）同45。126頁

49）同45。125頁。